

古いてさげかご

小川未明

青空文庫

ずつと前まえには、ちよつと旅行りょこうするのにも、バスケットを下げさげてゆくというふうで、流り行ゆうこうしたものです。年としちやんのお家うちに、その時分じぶん、お父とうさんや、お母かあさんが、お使いつかになつた古いバスケットがありました。

年としちやんが、ある年としの夏なつ、お母かあさんにつれられて田舎いなかへいったときには、このバスケットにりんごや、お菓子かしを入れて持つてゆきました。そして、帰かえりには、お土産みやげのほかに、海岸かいがんで拾ひろつた石いしころや、貝かいがらなどを中なかへ入れて、汽車きしゃに乗のると、このバスケットを網あみだなの上うへに載のせておきました。

年としちやんは、お母かあさんや、妹いもうとのたつ子こさんと汽車きしゃの窓まどから、青あお々あおとした外そとの景色けしきをながめていきますと、遠とおい白雲はくうんの中で、ぽかぽかと電いなづまがしていました。そのとき、汽車きしゃは、全速力ぜんそくを出だして走はしつていたので、頭あたまの上うへの網あみだながギイギイと音おとをたてていました。そのたびに、バスケットも揺ゆれています。年としちやんは、

「あのかごに、青あおい石いしや、赤あかい貝かいがらが入はいつているのだな。」と、なんとなく楽たのしかったのでした。

お家うちへ帰かえると、バスケットに入はいつていたものは、みんな出だされてしまいました。

「もう、このかごは、使いませんね。」と、いつて、お母さんは、バスケットを日に当ておしまいになりました。

その後のことでした。写真の入っている紙の箱が、写真を出したり、入れたりするうちにこわれたので、お母さんは、写真をこのバスケットの中へお移しになりました。写真入れとなったバスケットは、茶の間のたなの上に置かれたのでした。平常は、だれも、それに気をつけるものもなかったのです。

バスケットは、そこでほこりがかかり、だんだん古いうえにも古くなって、金具もさびてゆきました。

あるとき、お母さんは、たなの上をそうじなさつてバスケットをお下ろしになりました。「この中へ、なにが入っているでしょう?」と、お母さんは、写真が入っているのをお忘れになったのです。

「古い写真が入っているのよ。」と、お姉さんが、いいました。

「あ、そうだったね。」と、お母さんは、思い出しになりました。

「どれ、見ようか。」と、兄さんは、いつて、バスケットをあちらへ持つてゆきました。年ちゃんも、そのそばへゆきました。かわいそうに、バスケットの金具がとれかかって

います。

「あ、かぎをかけるところが、こわれているよ。」と、年ちやんが、いいました。

「いいよ、もう使わないのだから。」と、兄さんは、それを問題にしませんでした。

年ちやんは、一昨年の夏、田舎へいったときのことを思い出しました。

「あのときは、まだバスケットは、こんなでなかったのになあ。」と、思うと、なんだか悲しくなりました。

「このはかまをはいているのが、お母さんなの？」と、お姉さんは、一枚の古い写真を取り上げていいました。

「そう、お母さんだ、お母さんにも、こんな時代があったのかなあ。」と、兄さんは、笑いながら、見つめていました。

「僕にも、昔のお母さんを見せてよ。」と、年ちやんは、その写真を奪うようにしてながめました。それは、お母さんが、髪をお下げにした、女学生の時分の写真でした。

その他、お母さんの、その時代のお友だちの写真や、叔母さんのや、また年ちやんの赤ん坊のときの写真などが、いろいろと出てきました。

「さあ、見たら、そこへちらかしておかずにバスケットの中へ入れておいてくださいね。」

と、お母さんは、注意なさいました。みんなは、お母さんのいいつけを守って、取り出した写真しゃしんをバスケットの中なかへ入れて、もとのところへ載のせておきました。

バスケットは、たなの上うえで独り言ひとりごとをしたのです。

「やれ、やれ、私も、長い間ながあいだ、よく働はたらいたものだ。若いときは旅行りょこうもしたし、また重いものも入れて運はこんだりした。そして、つらいこともおもしろいこともあった。いまは、こんなに年としをとって、写真しゃしん入れにされてしまったが、いよいよこれが終おわりかなあ。」と、ため息いきをつけていました。

バスケットが、そう思おもったのも無理むりがありません。ところが、ある日ひ、年としちゃんのお家うちでねずみが出るでるので、知しったお家うちから、ねこの子こをもらうことになりました。

その家うちは、遠方えんぽうなので、電車でんしゃとバスに乗のらなければなりませんでした。

「さあ、どうして連つれてこよう？」と、みんなが、考かんがえていますと、

「ああわかった、あのバスケットへ入れてくればいだろう。」と、年としちゃんが、いいました。

「なるほど、あの中なかへ入れてくればいいわ、そして、あのかごをねこのかごにするといいのね。」と、お姉ねえさんは、いわれました。

そのねこの子を、年ちゃんとお姉さんの二人でもらいにゆくことになりました。

いよいよその日になると、バスケットは、たなの上から下ろされて、写真は、用だんすのひきだしの中へ場所換えをしました。

「きょうから、私は、かわいらしいねことお友だちになれるのだ。」と、バスケットは、喜びました。

しかし、ねこを入れてくるのには、バスケットは、具合がよかつたけれど、ねこのかごにはなりませんでした。それで、年ちゃんの学校でお点をつけていただいた、綴り方や、書き方の答案などを入れておくものにされました。

考えると、一つのバスケットにも、一代にはいろいろのことがあるものです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

※表題は底本では、「古《ふる》いてさげかご」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古いてさげかご

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>